宗教教育部通信　No.３

「追悼会」を迎えて

“散る桜　残る桜も　散る桜”

　これは､良寛の辞世の句といわれています。あの方も散っていかれた、この方も散っていかれたと、いつも眺めているばかりの私でした。
　しかし、残った桜も３０日も咲き続けていません。間もなく散っていくのです。かつては、良寛といえども、残る桜として枝にしがみついていたのでしたが、いつの頃からか、ともどもに散っていくのだと、そのとらわれから開放されていかれたことでしょう。良寛の目には、桜と一体になった良寛自身を見ていられたのです。辞世の句に悟りの風光がみてとれます。
　老少不定とか、会者定離とか、諸行無常とか、悲しい席で語る言葉ですが、なかなか自分に即しては語っていないようです。あくまでも、亡くなった人に対してであって、私自身のことではないのです。そこに抜きさしならない頑迷さがあります。
　どのようにすばらしい業績をあげている人でも、どのようにすばらしい名誉を手にしている人でも、それだけにとらわれている人であれば死を待つ人と同じです。

法句経に

「もし百年を生きたとしても　すぐれた法を知らないならば
それを知って一日を生きるに越したことはない」

とあります。その意味をかみしめてみたいものです。

　今回の追悼会は、多くの方々を追悼・思慕することになります。死を待つ消極的な生き方でなく、生死を超えていく積極的な生き方に転ずる機会にすることこそ、追悼会の迎え方ではないでしょうか。